

【附属資料】

展覧会に関する自己点検評価表（令和 5 年度）

- 1 センス・オブ・ワンダー：感覚で味わう美術
- 2 大大名の名宝－永青文庫×静岡県美の狩野派展
- 3 天地耕作 初源への道行き

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	センス・オブ・ワンダー: 感覚で味わう美術
------	-----------------------

期 間	令和5年4月18日(火)～7月9日(火) (72日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	南 美幸
------	------

学芸員の企画への参加の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>
マスコミ等による共催の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>	巡回の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>

記入日	企画	令和5年4月1日
	実績	令和5年9月9日

企画		実績・検証	
目的・内容	<p>【内容】 所蔵品から作品を選定し、静岡県立美術館の多様性に富むコレクションを楽しんでいただく展覧会。</p> <p>【目的】 静岡県立美術館のコレクションを新たな視点で鑑賞していただくことを目指す。具体的には、美術史的な展覧会ではなく、作品と感覚や記憶とを結びつける工夫によって、作品の新たな側面に気づくような展示とする。また、これまで展示歴の少なかった作品も出品し、当館コレクションのバリエーションの広さを改めて知っていただく機会とする。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術館が近年求められている課題に応える企画の質の高さと、コレクションの質の高さの双方が印象づけられた。美術史的なテーマの展覧会では展示するのが難しい作品も展示できた点も評価できる。レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』を展覧会名に引用したのは、観客にもわかりやすく、動員に功を奏したのではないかと。五感の相互の結びつきを取り戻そうとする本企画は、来館者の今後の鑑賞姿勢にも有益な提案をしたと考えられ、鑑賞者にとっては、それぞれの章のどれに興味をひかれるかを試す場ともなっていて、鑑賞者自身の自己理解にもつながったのではなかろうか。(山梨委員) ・コレクションを多面的に活用するだけでなく、従来の解説的教育論による展示ではなく、五感や共感覚を刺激し、構成主義的な視座から鑑賞者の経験や感性を開こうとする点で、内容の独自性や先駆性があり、研究面についていえば博物館展示論、博物館教育論的な観点から問題提起的である。各セクションに定番の名品が散りばめられており見応えがあったことに加え、今回のテーマによって掘り起こされた所蔵品もあり興味をひかれた。全体として水準の高い展示だったとは言え、あくまで視覚中心の展覧会であったので、例えば身体を刺激するような体験型の展示、VR展示等の割合を増やしたより楽しめる展覧会も今後計画できるかもしれない。(栗田委員) 	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>【ねらい】 五感による作品鑑賞を提示する。通常、芸術作品の大部分は視覚による鑑賞を基本とするが、作品の素材、モチーフや主題を、視覚以外の感覚器官(五感、空間感覚)、記憶や想像力を働かせて鑑賞することを誘い(ざ)なう。</p> <p>【ターゲット】 子どもから年配の方まで(主に中部地域在住)</p>	<p>【アンケートにみる特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に新規来館者において、若年層の観覧者が多かった。(20歳台以下61.6%、うち12歳以下30.8%) ・観覧者の居住地は静岡市内が50.7%と最も多かった。 ・来館回数については、最も多い層が3～5回目(25.3%)だった。新規来館者は17.3%だった。 ・2人以上の来館者について、同行者は友人・知人が25.0%と最も多かった。 ・来館理由は、「ポスターを見て」が32.0%と最も多かった。 ・全体的な満足度について、肯定的な評価が81.3%を占めた。 	
指標(数値目標)	観覧者数見込 7,000人	観覧者数 16,611人	
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 6,487千円 ・歳入 2,669千円 ・特財率 41.1% 	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 6,792千円 ・歳入 7,345千円 ・特財率 108.1% 	
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・草間彌生《水上の蜚》という体験型の作品の出品や、通常の鑑賞とは違った方法での鑑賞体験により、小さな子どもにも楽しめる展示とする。 ・草間彌生《水上の蜚》の動画を作成し、ホームページやSNS、県庁内のエレベーターホールで放映する。 ・静岡駅の地下道でチラシを配布するイベントを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の工夫が家族連れでの来館につながった。GWに重なる会期であったため、特にその期間に家族連れを呼び込めたことで、来館者増につながった。 ・草間彌生《水上の蜚》の動画は、特にSNSでは反響があり、X(旧Twitter)では5,000を超えるviewを獲得した。 ・チラシ配布のイベントでは、人通りの多い地下道で、チラシ300枚を配布し、ポスターを掲示することで、広く展覧会を周知することができた。 	
自己評価 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・五感による作品鑑賞の楽しみをコンセプトとし、古い西洋画から最新の美術作品まで、当館の多様性に富むコレクションを、楽しみながら現実(リアル)に感じていただくことを目指した展覧会である。当館所蔵品として有名な作品を、このような新たなテーマの設定により紹介することに加え、これまで展示の機会があまりなかった作品も公開することができた。 ・全身で作品を体感する呼び水として、作品のレプリカや彫刻の素材に触れられる展示や、自然の音や音楽を流すことにより視覚と聴覚に訴えかける工夫なども行なった。 ・展覧会のテーマの分かりやすさ、鑑賞のきっかけの工夫、またメイン・ビジュアルに草間彌生の作品を起用したことなどが功を奏したと思われ、当初見込みよりも倍以上の入場者にご来場いただいた。 ・全ジャンルの所蔵品を出品したが、他の展覧会との兼ね合いにより、日本画が少ない展示となった。 ・鑑賞者それぞれの感覚を用いた作品鑑賞をコンセプトとしたため、文字による説明は章ごとのパネルや個々の作品解説にとどめた。これらの解説が分かりやすいとのご意見もある一方で、図録がほしいとのご意見もあり、所蔵品のカタログをどのように充実させてゆか、今後の参考課題となった。 		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	大大名の名宝—永青文庫×静岡県美の狩野派展
------	-----------------------

期 間	令和5年10月17日(火)～12月10日(火) (48日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	石上充代
------	------

学芸員の企画への参加の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>
マスコミ等による共催の有無	有 <input type="radio"/> 無 <input checked="" type="radio"/>	巡回の有無	有 <input type="radio"/> 無 <input checked="" type="radio"/>

記入日	企画	令和5年4月1日
	実績	令和6年1月30日

	企画	実績・検証
目的・内容	<p>【内容】 狩野派の傑作や重要作を多く含む永青文庫の狩野派コレクションと、静岡県立美術館の狩野派作品とを組み合わせさせてご覧いただく展覧会。名品を通して狩野派の歴史を辿りつつ、最新の研究成果を盛り込み、狩野派による中国絵画の鑑定や大名道具にまつわる仕事、また熊本藩の御抱絵師であった肥後狩野派についても注目し、幅広く大名家と狩野派の関わりを紹介する。</p> <p>【目的】 ・室町時代から幕末まで、狩野派400年の歴史を名品を通してご覧いただき、その魅力を伝える。 ・永青文庫の狩野派の全容を調査した成果を踏まえ、最新の研究成果を紹介する。 ・狩野派の活動の史的意義を改めて評価し、作品の素晴らしさを伝える機会とする。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 (展覧会)永青文庫と匹敵する狩野派の所蔵品を作り上げた県立美術館も立派なもの、それを痛感せしめる展示であった。歴代学芸員の努力と、それを支えた管理、県の理解とを称えたい。 狩野派の資料をこれだけ所蔵できたのは、伊豆が狩野家の本貫地との認識があったからだと思うのだが、その点にまで見据えた展示をそろそろ考えてもよいのでは。狩野派研究での静岡県美の大きさからみれば、計画してもよい展覧会だと思う。 (図録)図録に落款印章の図版を載せるのはもはや当然と云うところだろうが、外題、極め書まで入れてあるのは、現在の関心に応えたと評価したい。 今後とも研究に裏付けられたコレクションの充実を期待する。今回の展示でも近年収蔵された資料が使われている、実際に活用されているのは喜ばしい。(榊原委員) (展覧会)狩野派のコレクション(大大名細川家)の成り立ちがよくわかる展示構成であり、狩野奔流の展開が理解できるように工夫されていた。栄信と探信の活躍は、江戸狩野派を刷新したことを具体的に示しているが、それを作品で見せてくれたところが興味深かった。収集、展覧会活動、研究という三つの部門の充実がはかられており、今後とも継続されることが望ましい。 (図録)図録において、二人の学芸員の対談を載せ、展覧会の概要と趣旨をわかりやすく説いている。今まで美術館・博物館の図録ではあまりなかったことで、企画が、蒐集、展示、研究というトライアングルで進められていることを明示している。(金原委員)</p>
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>【ねらい】 ・室町から幕末までの狩野派の名品を通して、狩野派の魅力伝える。 ・大名家にまつわる狩野派の画事を紹介することで、狩野派の幅広い分野における活躍と御抱絵師の仕事の実態について理解を深める。 ・近世における狩野派の幅広い役割とその史的意義を伝える。</p> <p>【ターゲット】 ・近世絵画に興味のある方 ・日本史、特に近世史に興味のある方</p>	<p>【アンケートにみる特徴】 ・50歳以上の観覧者が63.5%、うち70歳以上が19.5%(他展では9%台)と、高齢者層の来館が多かった。 ・新規来館者のうち53.7%が県外居住者という特異な数値を示した。 ・来館回数は、20回以上が20.8%であるとともに、初めての来館者も22.9%と比較的高い数値を示した。 ・2人以上の来館者のうち、同行者は配偶者が51.1%と最も高かった。 ・来館理由は、「静岡県立美術館のwebまたはSNSなどを見て」が22.0%と他展に比べて高かった。 ・全体的な満足度について、肯定的な評価が89.4%を占めた。</p>
指標(数値目標)	観覧者数見込 12,000人	観覧者数 8,290人
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> 歳出 14,386千円 歳入 9,211千円 特財率 64.0% 	<ul style="list-style-type: none"> 歳出 12,638千円 歳入 5,476千円 特財率 43.3%
広報戦略 主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・狩野派は中国絵画との関わりが深いことから、東アジア文化都市関連事業として幅広く周知の機会を作る。 ・ガストロノミー・リズム関連企画展として位置付け、イベント等を開催、広報機会に結び付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・通常の発送先に加え、日本画に関心のある層に届くよう広報物の発送先を追加した。 ・開幕にあわせてエントランスにおいてレセプションを開催、県産食材を利用した料理の提供などで話題を作り、情報発信の機会とした。 ・展覧会内容と関連つけた食文化に関するイベントを開催し、広報機会とした。
自己評価 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・当館が長年にわたり調査研究を深め収集と展示を行ってきた狩野派について、大大名細川家の伝来品を核とする永青文庫のコレクションと当館コレクションを組み合わせ構成し、400年に及ぶ狩野派の歴史を名品によってたどり、その魅力を伝える内容とした。 ・大名家ならではの狩野派が関わった調度品や中国絵画の鑑定に関する仕事など、絵画制作だけではない狩野派の幅広い役割について最新の研究成果を含めて紹介した。また、肥後狩野派の画業にも注目し、地元熊本以外では公開機会のなかった作品群を展示、その成立と展開について考察し、新知見を提示した。 ・両館のコラボレーションにより、コレクションを基礎にして狩野派研究の進展に貢献することができ、収集、展示、調査研究を連関させた美術館活動の成果を形にすることができた。 ・子どものための分かりやすい解説やハンドアウトなど、幅広い観覧者に狩野派の世界に親しんでもらう対策まで手がまわらなかった。狩野派の充実したコレクションと展覧会の実績を踏まえて、今後は、狩野派についての語り方・伝え方を工夫し、その魅力を広く理解していただくための教育普及面での努力が必要である。 ・集客の点では目標に届かなかった。過去の狩野派展の検証をもとに広報面の工夫が必要である。 	

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	天地耕作 初源への道行き
------	--------------

期 間	令和6年2月10日(土)～3月27日(日) (40日間)
-----	------------------------------

場 所	静岡県立美術館第1～5展示室
-----	----------------

担当者名	植松 篤
------	------

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
---------------	--	-------------------------------	--

マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
---------------	--	-------	--

記入日	企画	令和6年10月24
	実績	2024年4月1日

	企画	実績・検証
目的・内容	<p>【内容】 本展は、本県出身の村上誠、渡兄弟と、山本裕司による美術制作プロジェクト「天地耕作」の活動を辿る。天地耕作は野外作品を主としており、写真以外の作品は現存していない。そのため、写真や映像などにより、基本的には年代に沿って、彼らの活動紹介する。展示室では、作品理解の補助とするため、インスタレーションを発表する。また、美術館裏山では、未完となっていた野外作品プランを実現することにより、実作品に触れる機会とする。</p> <p>【目的】 当館はこれまで本県ゆかりの作家を顕彰してきているが、現代美術ジャンルにおいては、本県ゆかりの作家を主とする企画展の回数は多くはない。そこで、本県出身で、静岡市美術館での「アーカイブ／1980年代～静岡」展(2019年)や、山本浩貴著『ポスト人新世の芸術』(2022年)で紹介され、評価の高まりつつある、天地耕作を取り上げる。かれらの活動は、その性質上、実見した鑑賞者は少なく、その全容が知られていない。本展では、彼らの全活動を明らかにする。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 基本的に野外で制作・表現を行うという、独自の活動を行ってきた地元のグループを取り上げた積極的な姿勢に敬意を表したい。美術館の地の利を活かして裏山で新たに「天地耕作七」を実際に展開させただけでなく、館内には、インスタレーション「白蓋」という新作を並べ、それらを中心に、「天地耕作」以前のメンバーの作品、今では見たり体験したりすることができない、それ以後の「天地耕作」シリーズの活動を、見応えのある写真と資料で紹介するという、配慮の行き届いた充実した展観であった。美術館という白い箱の外にこそ場を見出している芸術活動を美術館で紹介しようとしたこと自体が、チャレンジであったと思う。(潮江委員)</p> <p>「天地耕作」は静岡県内で活動した作家であり、静岡県立美術館のAヴァリューでの展示も行っている点で、美術館とのゆかりが深い。インタビュー記事では、山本が60年代に静岡で活動したグループ幻触の影響を語っており、1980年代後半から静岡県内で制作を行った「天地耕作」を位置づける本展覧会は、静岡県立美術館ならではの企画である。これまでの作品が残されていない中で、制作活動を位置づけようとする企画は多くの困難を伴ったものと予想されるが、制作過程や作品を記録した写真の質が高く、見ごたえのある展示となった。(山梨委員)</p>
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>【ねらい】 展示構成としては、比較的スタンダードな手法を用い、活動があまり知られていない作家について全容を把握しやすいよう、立案する。図録については資料性の高いものを作成する。</p> <p>【ターゲット】 県内外の現代美術ファン 20代から60代の年齢層</p>	<p>【アンケートにみる特徴】 ※実施せず</p>
指標(数値目標)	観覧者数見込 5,500人	観覧者数 5,560人
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 9,600千円 ・歳入 3,128千円 ・特財率 32.6% 	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 12,006千円 ・歳入 5,671千円 ・特財率 47.2%
広報戦略 主な取組	<p>大学と連携し、講義等に出講し、企画の理解を促すとともに、周知の機会とする。 収蔵品展とも関連性を持たせることで、相乗効果を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・助成金獲得により、新聞社に名義共催を依頼することができ、広く周知することができた。 ・収蔵品展を本展の関連企画として実施し、収蔵品展や本展に関わる80年代の静岡の美術について新聞に寄稿する機会を得た。相乗効果があったかと思われる。
自己評価 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡出身の3名による野外美術制作プロジェクト「天地耕作」の美術館初の回顧展となった。作品の残らない彼らの活動について、写真を中心に、映像や資料、詳しい年表をあわせて展示することで、その全貌を紹介することができた。 ・記録だけでなく、展示室内での新作インスタレーション発表や美術館裏山での野外制作を実施し、また作品と一体として行われてきたパフォーマンスについても上演し、彼らの作品、活動を実際に体験する機会を提供することができた。 ・パフォーマンス以外にも関連イベントを多数実施し、鑑賞を深める機会を様々な提供することができた。 ・これまで静岡の現代美術を中心に据えた企画は多くなかったが、収蔵品展とも関連させることで、当県の現代美術を跡づけることができた。 ・来館者数は目標を達成したが、特別講演会では著名な研究者を招へいしたにもかかわらず振るわなかった。より積極的な広報が必要だったかと思われる。 ・前年度から計4回大学に出講したが、教育普及としての意義はあったと言えるとしても、人数で言えば広報効果は薄かったようだ。若者層に向けたPRについては、再検討の余地がある。 ・展示室内での来館者の撮影は禁止としたため、ウェブ等でそれを補う広報をすれば、来館を検討する方にとっては親切であったらう。 	